歴史地震
第20号(2005) 133-144頁
受付日2005/1/31, 受理日2005/3/9

慶長九年十二月十六日(1605.2.3)の津波の房総における被害の検証

東京大学地震研究所* 伊藤 純一・都司 嘉宣・行谷 佑一

Reexamination of the Keicho Tsunami (1605) on the Coastal Area of the Boso Peninsula

Junichi ITO, Yoshinobu TSUJI, and Yuichi NAMEGAYA

Earthquake Research Institute, the University of Tokyo
Yayoi 1-1-1, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0032 Japan

The Keicho (Nankai) earthquake is thought to be the most mysterious earthquake in the series of gigantic Nankai and Tokai earthquakes along the Nankai trough. According to the diaries, archives and chronicles of the same age, nobody felt the earthquake in the most densely populated Kyoto and Osaka area. However, tsunami attacked southern coast of Shikoku and Honsyu Islands, Hachijojima Island, and even the eastern coast of the Boso peninsula. Some books of war history in the Boso area told that serious damage was brought about by earthquake and tsunami. Many seismologists doubt of these descriptions of not-so-credible history books. We examined archives, documents, and books of local history and legend in the Boso area now available. Books chiefly interested in the battle and conspiracy at that time should be carefully examined, but some documents cited there coincide with most credible history written in early 17th century. Fortunately, we found new documents on the Keicho tsunami in the archives of Saitokuji Temple in the village of Amatsura near Kamogawa City, southeastern coast of the Boso peninsula. In a war history book called "Boso Chiranki", Amatsura was listed as one of 35 villages attacked by tsunami, and the Saitokuji documents stressed that only two or three people survived the tsunami at the village. Existence of tsunami on Boso coast on February 1605 now becomes more convincing.

§1. はじめに

慶長九年十二月十六日(1605年2月3日)に発生した「慶長南海・東海地震」は，近畿地方で地震を感じたという記録が無いなど，南海トラフ系の大地震としては非常に特異なものであり，史料が限られているために，その地震像は充分解明されていない．

この地震の謎をさらに大きくしているのは，房総半島で津波によって大きな被害があったとされていることである．『房総軍記』等は，この地域での地震動も極めて大きかったとしている．一方，これらの軍記類に記された房総大地震・津波の日付は，天正十八年，慶長六年など，年も月もまちまちである．

慶長房総大地震・津波の記事をどう評価するかによって，「慶長南海・東海地震」の全体像も大きく変わらざるを得ない．

近世初頭の関東の史料は豊富とは言えないが，幸い新史料を見出すことができたので，これを紹介すると共に，慶長房総津波(地震)が存在したか否かを現時点で検証し，今後，慶長九年の地震・津波の全体像について研究者の関心が高まることを期待したい．

§2. 慶長房総津波への疑問

慶長九年に房総半島で津波による被害が出たことが疑問視される主な理由は次の3点である．

(1) 信頼性の高い史料が乏しい．
(2) 軍記類には多くの被災地が列挙されているが，そこに書かれた地名の現地には慶長の津波についての記録も伝承もほとんど残っていない．
(3) 被災地域とされる海岸の村々のうち幾つかは72年後の延宝五年(1677)にまた津波に襲われ，約百年後の元禄十六年(1703)年には，ほとんどの村が元禄地震の津波で大打撃を受けている．これらの津波についての記録は多数存在するのに，百年足らず前の津波被害への言及が無い．

これらの疑問点に留意しながら，現存する史料を検討してみよう．

* 〒113-0032 東京都文京区弥生1-1-1

§3. 慶長の関東地震・津波の確実な記録

『増訂大日本地震史料　第一巻』に紹介された『義演准后日記』には「慶長十年正月六日霽，昨日相国寺允長老，留守居良首座江音信，旧冬十五日，武蔵国江戸辺大地震の由注進候，此辺不覚，誠聊震歟」と記されている．しかし，この時期に房総地域以外の関東各地で大きな自然災害が発生したことを示唆するような記事は，年代記，書状や古寺の過去帳（たとえば森田（編）（1985）『本土寺過去帳年表』参照）等いかなる史料からも未だ見つかっていない．

房総での被災について書かれた最も信頼度の高い史料は『当代記』である．『徳川実紀』も，房総の津波については『当代記』をそのまま引用している．

「・・・地震は所により大小あり，関東も同前，上総国小田喜領海辺取分大波来て，人馬数百死，中にも七村跡なしと云々，諸国内の海は不苦，摂州兵庫の浦は一円不苦・・・」（小田喜，原文は小喜田）

『当代記』はこの時代の基本史料であるが，著者や成立年は明らかになっていない．

自然災害記録媒体としての『当代記』については，田中・小山（2000）による詳しい分析がある．『当代記』の筆者の視点もしくは居住地が，江戸や関東地域にないことはこの論文により明確になった．将軍の動静，諸大名の内情から世間の噂話まで，様々な情報を入手できる，家康政権内部または周辺の筆者と考えられ，房総の津波についての記事も，小田喜（大多喜）藩から幕府への報告などによった可能性がある．問題は，ここで述べられている小田喜領の被災地がどこなのかであるが，これについては後に考察する．

日記そのものではないが，近藤富蔵の『八丈実記』等，八丈島の史料に記録された慶長の津波の記事は重要である．特に，南海トラフ系地震とは別の日時に房総沖で地震があったのか否かを論じる際には，大きな意味を持って来る．

伊豆各地の津波についての伝えも，全体的に信憑性の高いものと考えられ重要である．

§4. 房総の同時代史料

地震・津波当時の関東地方の生の「日記」は残っていないが，寺社の年代記などの中には，古い記録に基づいて書かれたと推測されるものがある．しかし，関東・甲信・奥羽の古い年代記で，慶長九年の地震や津波について記したものは見出されていない．

中世～戦国時代の地震記録を伝える貴重な史料が，房総半島に残されていた．千葉県夷隅郡御宿町岩和田の大宮神社の記録である．

『増訂大日本地震史料』）第一巻に収められた『大宮神社古記録抄』の記事は，永仁元年(1292)の鎌倉地震から始まるが，これは別としても永和四年（天授四年）(1378)から慶長九年まで，神社の古い日記または記録に基づいたと思われる多くの有感地震の記録が載っている．慶長九年の記事は；

「慶長九年雪（霜）月十六日大地震動，東向海辺人民六畜悉死，ウミノ浪水入致し，卅九日ユリ申候也．」（ p.676 ）なお「雪月」の雪に（霜）と傍注したのは既に今村（1943）が指摘しているように編者の誤りで，「雪月」はれっきとした陰暦十二月の異称である．

ところが，現在『大宮神社古記録抄』という本は，全く見当たらない．御宿町の教育委員会や，現在の大宮神社も訪ねたが，古記録についての手がかりは全く無かった．町史編纂委員会活動当時に作成された文書目録や蔵書リストにはそれらしい記載は無く，この題名の本を所蔵している家も見当たらなかった．

『増訂大日本地震史料』（以下，『増訂』と略記）に引用された部分だけからも，この古記録は，御宿町にとっても貴重な史料であることは明らかなので，旧町史編纂委員や郷土史研究家の方々のご指導を仰ぎ何とかこの「幻の史料」を捜し出したいと考えている．

房総地域で他に日記に準じる史料として，銚子の『玄蕃先代集』がある．『新収日本地震史料』（以下，『新収』）第 2 巻，p. 103 に収録された慶長十九年十月二十五日（1614 年 11 月 26 日）の津波の記事は，慶長の房総津波または三陸津波の訛伝か混同ではないか，吟味を要するところであるが，記述が具体的なので，推測は避けて今後の研究を俟ちたい．慶長九年付の津波の記事が無い事を，銚子に目立った津波被害が無かったことの証拠として使うのは現時点では無理であろう．

§5.「軍記物」の記録

この時期に房総で大地震・大津波があったと記しているのは，江戸時代中ごろに成った「軍記」類である．その主なものと地震の日付を記せば；

○『房総治乱記』（『増訂』Ⅰ，p.675）

「慶長六年十二月十六日，大地震，山崩海埋テ岳トナル此時安房，上総，下総，海上俄ニ潮引テ・・・二日一夜也，同十七日子ノ刻沖ノ方夥ク鳴テ潮大山ノ如クニ巻上テ・・・」

○『房総軍記』（『新収』Ⅱ，p.89）

「慶長六年辛丑十月十六日俄に大地震動

く，‥安房上総の海は須叟に‥干潟して‥二日一夜‥同十七日子の刻に方々夥しく鳴動し‥逆浪張り溢れて，潮水巻き上り‥」

○『関八州古戦録』(『新収』Ⅰ，p.173)

「天正十八年二月十六日夜諸国一同大地震シタル中ニ安房上総ノ両国殊更ニ夥シク‥暁方ニナリテ海上ノ潮俄ニ引三十余町干潟トナル‥二日一夜ノ干潟‥同キ十八日子刻許杳ナル沖ノ方鳴動ス‥姑クノ後高潮打寄テ洪波漲リ来リ‥

内容・表現から，共通の原資料に依拠していることは明白である．上記諸書の記事の間で親子関係が存在する可能性もある．

このうち，『関八州古戦録』は享保 11 年の成立である．その他はそれより前と言われるが，はっきりしない．『房総治乱記』は，「寛永頃から遅くとも寛文頃まで」に書かれたという推測もある．(『房総叢書第二巻』，房総治乱記解説) 『房総治乱記』が扱っているのは，天正十五年に正木左近大夫をめぐる戦いが始まってから天正十八年に関八州が徳川家康の領地となるまでのわずか 3 年間の歴史で，末尾に付録のように「慶長六年」の大地震潮災と慶長十四年の南蛮船漂着の記事が添えられている．

「軍記物」の記事は，歴史地震研究者にとって貴重な史料であると同時に悩みの種であることが少なくない．房総地域の場合，戦国時代の政治・軍事情勢は極めて複雑で，物語を盛り上げるのに最も効果的な時点に天災地変の記事が挿入されたとしても不思議ではない．また，天正十八年の徳川氏支配確立と旧勢力の没落，慶長八年の里見義康の死，慶長十八年の里見忠義の安房追放(実質的には伯耆倉吉へ配流され，元和八年死亡して里見氏は断絶．)という年代記上の柱があり，上掲 3 史料の地震の年の設定にも，その影響を見ることができるのかも知れない．

かなり「危険な史料」ではあるとはいえ著者が既に失われた慶長津波に関する何らかの記録や伝説に基づいて書いたことは間違い無い．特に『房総治乱記』には「潮災に逢った」のは全部で 45 ケ所と明記している．但し実際に書かれている地名は 35 ヶ所のみで，『関八州古戦録』は 45 ケ所という数字のみ記す．

安川惟礼(柳渓)が著した『上総国誌』(1877)には，『房総記』の記した同様の記事が，堂々たる正式の漢文で紹介されている．(『新収日本地震史料』第 2 巻に，『私説　勝浦史』からの引用が収録されている．)

この名文の作者は安川惟礼自身だと考えられる．『房総記』は未詳だが，地震・津波記事の内容は『房総治乱記』と同じものであろう．こちらは「総計四十八村也」としているが，書かれたのは 21 のみである．その内 20 は『房総治乱記』のリストに入っているが，「勝浦」は『上総国誌(房総記)』だけが記している．

なお『補訂版　国書総目録』第七巻には『房総記』という項目があるが [内閣文庫所蔵文鳳堂雑纂 3]，閲覧したところ実際には『房総治乱記』で，内閣文庫の目録でも『房総治乱記』となっており，『房総記』としたのは国書総目録編纂の際の誤りと思われる．

これだけ沢山記された村々のどこでも慶長津波で被害があったことが確認できないでいたため，従来はこのリスト自体が作り話とみなされがちだった．

§6. 慶長津波の被災地(『房総治乱記』による)

『房総治乱記』に記された地点(括弧内は現在の表記)は次の通りである．

「先づ潮災に逢ひしは

部原(へばら)，新官浜(しんかん)，沢倉浜(さわくら)，小湊(こみなと)，内浦(うちうら)，天津(あまつ)，浜萩(はまおぎ)(浜荻が正しい)，前原(まえばら)，磯村(いそむら)，浪太(なぶと)(波太：現在の太海(ふとみ))，天面(あまつら)，大夫崎(たゆうざき)(太夫崎)，江見(えみ)，和田(わだ)，白古(しらこ)(白子)，辺楯(へだて)(平館)，忽戸(こつと)，横桶(よこすか)(横渚が正しい)，御宿(おんじゅく)，岩和田(いわわだ)，岩舟(いわふね)(岩船)，矢指戸(やさしど)(矢差戸)，小浜(こばま)，塩田(しおた)，日在(ひあり)，和泉(いずみ)，東浪見(とらみ)，一の宮(いちのみや)(一宮)，南白亀(なばき)，一松(ひとつまつ)，牛込(うしごめ)，剃金(そりがね)，阿負(あお)(粟生)浜，片貝(かたかい)，不動堂(ふどうどう)．

すべて四十五ヶ所なり．」

以上 35 ヶ所を地図上にプロットしたのが図 1 の○印である．九十九里浜から南端の白浜町まで，房総半島太平洋岸の全域に及んでいる．大宮神社が存在する岩和田や後述する天面も地名の中に含まれている．

§7. 小田喜(大多喜)藩領の村々

天正十八年 (1590)，徳川家康が関東に入ると，里見氏の領地は安房一国に限定され，上総小田喜(大多喜と書くのは本多氏以降)には有力武将の本多忠勝が入城して 10 万石を領した．関ヶ原の戦いで徳川氏の覇権が確立すると，本多忠勝は桑名に転封となり，次男の忠朝が大多喜 5 万石を領することになった．(慶長六年正月)．『当代記』の「上総小田喜領」は，この本多出雲守忠朝の領地を指している．

本多氏時代の大多喜藩については史料が極めて乏しく，慶長期の地震や津波についての記録も未発見であるが，藩領については地元の旧家に残されていた『慶長五庚子年　本多出雲守領分高附帳』という

史料が発見され，川名・他(1984)により，その他の史料と総合して復元が行われた．慶長五年というのは襲封の年と合わず，合計高が 5 万石にやや足りないなど問題はあるものの，大多喜藩領の大体の様子は把握できる．特に，領地が大多喜城を中心にまとまっており，本多忠勝の時代はともかく，本多忠朝の大多喜藩が遠方（慶長南海／東海地の津波被害域）に飛び地を持たないことが確認できたことは重要である．

高附帳に記載された本多忠朝の領地は，夷隅郡の 52 ヶ村と埴生郡の 2 ヶ村であった．

このうち，海に面した村々は以下の通りである．

○現・夷隅郡地域に

江場土，日在，内野，中魚落郷，岩船，岩和田，御宿

以上 7 ヶ村．

○少し離れて，南の現・勝浦市の南の地域に

奥津（興津．古代には置津），浜行川の 2 ヶ村．

『当代記』に言う海辺七村と近い数字で，特に北側にまとまった村々の数が，正に 7 ヶ村であることは興味深い．図 1 の×印がこれらの村々である．

下線を施した村名は，『房総治乱記』のリストに記されている．それ以外の村も，江場土は夷隅川をはさんで和泉に対し，内野村の海岸に面した深堀地区は塩田のすぐ北側であり，中魚落郷の海に面した部分が小浜である．つまり，北の 7 村の沿岸部は『房総治乱記』のリストの被災地域に完全に重なっている．

一方，大多喜藩領の南の沿岸部の奥津・浜行川（現在の外房線の興津から行川アイランドにかけて）は，『房総治乱記』のリストの空白域にあたっている．

こうして見て行くと，疑問視された『房総治乱記』の被災地リストと，『当代記』の言う小田喜領海辺七村の記述が，意外な整合性を有することがわかる．

大宮神社の存在する岩和田は，どちらのリストにも登場する村である．

後に述べるように，『房総治乱記』の慶長津波の被害リストは付録的に付け加えられたものであり，「軍記物」らしい，物語を盛り上げるための作為として一概に退けるのには慎重でなければならない。

問題は，岩和田を除く，これほど多数の被災地の地元に慶長津波の記録がなぜ見出されないのかである．

§8. 慶長津波の史料が少ない理由

近世初期の房総地域の記録は極めて乏しい．

山本（1995）が指摘しているように，外房沿岸の村落の寛永期以降の変化が大きかったことが基本的な原因であろう．ただし，『房総治乱記』のリストを「初めに「外房に大地震津波ありき」の先入概念があって各聚落を列挙したのであって，各部落の実態調査の上に結論を導いたとは思われない」と断定する結論は，やや尚早のように思われる．

里見氏の廃絶など中世以来の支配層が排除されたことや，江戸時代末まで継続する有力藩の欠如も史料が乏しい理由の一つであろう．

もちろん，慶長津波の被災地が，その後，はるかに規模の大きい元禄津波に襲われ，記録類も多くが失われたことが，元禄より前の津波の記憶がほとんど残らなかった最大の要因の一つに間違い無い．

『房総治乱記』に記された被災地のうち，天面村，太夫崎村，江見村のように，元禄津波では大きな被害が記録されていない村があることも注目される．

定かでない慶長津波を真実らしく印象付けるために元禄津波の際の被災地名から適当に選んだというわけではなさそうに思われる．

§9. 新史料の発見：安房天面山西徳寺『御縁起』

史料的な限界を打開するために，寺社の記録に注目し，明治 12 年の通達により作られた『千葉県寺院明細帳』・『千葉県神社明細帳』を調べていたところ，安房国長狭郡天面村（現在，鴨川市天面 163-1）の真言宗 天面山 西徳寺が，慶長九年の洪波で悉皆流失したと書かれていることがわかった．

2004 年 7 月 9 日，西徳寺を訪問し，西徳寺と隣接の天面の善光寺，それに西院の河原地蔵尊の住職を務められる島津実隆氏のお話をうかがい，寺の縁起等を拝見させていただくことができた．

最も重要な史料は『御縁起』という巻物一巻で，上質の紙に謹直な楷書体で書かれ，ちょうど漢文の教科書のように，返り点や送り仮名，ときには振り仮名も，本文と同筆と思われる字で添えられている．

巻末には，享保十五年（1730）七月十日より開帳された際に，古本を以て書写したと書かれている．

字体や紙の状態，それに伝存の状況から，これは享保十五年に書かれた巻物そのものと思われる．

写真版で，全体をご覧いただくことにする．（史料）

縁起の概略は，次のようなものである．

「伝え聞くところによれば，当寺の本尊は信濃の善光寺が建立された時に奉納された金銀・刀剣・鏡の類を用いて鋳造されて縁のある国におさめられた四十八体の尊像の随一であるという．寺を草創したのは領主の有馬氏で，場所は明堂（めいどう）であった．

乱世になって有馬氏は没落し，新しい領主は阿弥陀仏を信じないで御堂を破壊したばかりか，尊像の金をねらって破壊しようとさえした．しかし，様々な罰を受けて恐怖した領主は，尊像を当所に奉還し，観音堂に安置した．善入の代に，鈴木某が十方の助力を募って御堂をこの場所に建立した．

ところが，慶長九年甲辰歳の十二月十六日丑刻に，嶺鳴り谿響き，六種振動して，洪波が陸に騰った．（世に津波という）．民屋共に流漂し，幸いに死を免れた者は二三人であった．この時より前は，本多善光夫婦と有馬氏夫婦の肖像がそろっていた．本尊も肖像も行方不明になってしまったが，明神の御洗井に毎夜光があり，卜筮によって本尊がこの井戸に在ることが教えられた．歓喜して掘ってみたところ，三尊と運慶作の観音像を得た．そこで仮屋に据え奉り，その後二つの小堂を建立して三尊と観音を安置し奉った．

今ある礎石二つは本尊と共に信州から来たとも，有馬氏が建立した時の石ともいう．石塔は大小数知れずあったが乱世の間に次第に賊に奪われ，ようやく残った小五輪一二基が三十年前にこの場所に取り据えられたのである．伝えるところでは，かの津波の前に，本尊が扉を開いて出現するという霊瑞が四五度もあったのに，善入は何も知らないでその度にもとの場所にお収めしたのだという．

また，先の住職の法印源慶は，九十歳で天和壬戌年（天和二年：1682）に歿したが，生涯に経験した奇瑞は筆や紙では書き尽くせない．たとえば（中略）
そのほかは枚挙にいとまが無いので略す．縁起は以上の通りである．

享保十五庚戌歳相丁三十三年七月十日ヨリ
奉開帳畢　此砌以古本書寫焉
　　房州長狭郡　天面山　　西徳寺　　」

地震・津波そのものについて述べた部分を以下に示す．もとの文字は写真版で判読していただけると思われるので，原文の送り仮名や振り仮名ニ忠実に従った書き下し文とする；

「然ル所ニ慶長九年甲辰ノ歳十二月十六日丑ノ尅嶺鳴リ谿響キ六種振動シテ洪波陸ニ騰ル　世ニ津波ト曰フ　民屋共ニ流漂シ幸ニ死ヲ逸ルル者二三人ト矣
（中略）
扨本尊ノ御影在所拠ヲ失フニ又明神ノ御洗井ニ夜々光有リ　卜筮ニ尋ルニ本尊彼ノ井ニ在ト教ユ　歓喜シテ之ヲ掘ルニ　三尊并ニ運慶ノ作之観音ヲ得タリ則チ假屋ニ居ヘ奉リ　舊跡今ニ在リ　其後小堂両宇建立シ此尊并ニ観音ヲ安置シ奉　又今有所礎石二ツハ本尊ト共ニ信州ヨリ来トモ云ヒ有馬建立ノ石トモ云フ」

「六種振動（震動）」というのは仏教語で，本来，世に祥瑞ある時大地が震動する相を六類に分けたものだという．動き方，大きさなどにより分類する場合と，地動の方向によって分類する場合があるようであるが（宇井伯壽（1938）『コンサイス仏教辞典』），ここでは，ありとあらゆる振動ぐらいの意味で使っているのではないだろうか．

寺宝というべきこの巻物の他に，巻物を書き写したと思われる写本と，『天面山略縁起（阿弥陀如来略縁起）』という小型の木版本が存在する．

後者は江戸時代後期のものと思われるが，様々の霊験を述べた後，末尾に「誠に一度歩みを運ぶ輩には現には広大の福寿を得，所願心に任せ当来には安泰の花台に往生せん」と書かれているように，当寺の阿弥陀如来の霊験を広く伝えるために配布されたパンフレットだったのだろう．内容はその名の通り，『御縁起』の内容を簡略化し，文章を分かり易くしたものである．地震・津波の部分を書き下せば；

「・・依って寺主里民力をあはせ十方の助成を乞ひ堂舎再興成就し畢ぬ．然る所に，慶長九辰ノ冬，嶺鳴り谷響きて，洪波陸に騰る．世に津波と云ふ　浦々の民屋流漂せり．此の前日，本尊自ら金帳を開き出現四度に及ぶ．寺主，故を知らず・・」

なお，霊験を列挙した最後に『御縁起』に無い一項が追加されている．

「其後，宝永年中，山海鳴渡り津々浦々共に浪に漂う．然有とも当郷の里民故障なく堂舎安穏にして，本尊須弥壇に現然たり．」

（句読点以外振り仮名も原文通り）

「宝永年中」は元禄十六年の誤りではないかと思われる．作者が宝永年間の地震津波や富士山噴火について知識があったため混乱したのかも知れない．

現在の西徳寺は，天面の集落を見下ろす海抜10m 余の段丘の上にある．御住職のお話によると，慶長津波の当時は，段丘の下の海岸付近にあったという伝えがあるそうである．一方，千葉県教育委員会と，鴨川市教育委員会が西徳寺参道の入口に建てた「千葉県指定有形文化財銅造阿弥陀如来及び両脇侍立像（昭和三十五年六月三日指定，西徳寺蔵）」

案内板には，次のように書かれている；

「この三尊像は，ここから東北 1 キロメートルの所にあった明幢院という寺に安置されていたが，慶長の津波によりその寺が流失したため，当所に移されたと伝えられている．」（昭和五十年十二月十日）

「明幢院」は『御縁起』の「明堂」と対応するのだろうが，『御縁起』では明堂にあったのは有馬氏の時代と書かれている．

『御縁起』本文では，津波によって寺の所在地が大きく動いたような印象を受けないが，それでは津波の波高が十数メートル以上ということになり，いかにも高すぎる印象を受ける．

津波前の本堂の所在地についてはさらに御住職からお話をうかがい，『御縁起』にある「旧跡」や「礎石」，「石塔」さらに「明堂」も調査して慎重に結論を出したい．『御縁起』やその他の所蔵文書・記録についても，専門家の助言を仰ぎ，文字の解読や解釈も含め，よりしっかりしたテキストを研究者に提供できるようにしたいと考えている．

§10. 元禄津波の「一つ前の津波」に言及した史料

最初に述べたように，元禄地震による津波についての記録は多数残されているのに，約百年前にも津波で被災したことに言及した史料が見当たらないことは，慶長九年の津波が，あったとしても小規模で，極めて限定された範囲に限られたものと考える根拠となって来た．しかし，そのような史料が全く無いわけではない．

その一つは九十九里浜の千葉県長生郡白子町関小母佐の池上家の祖先である池上安濶が書き残した『一代記　付り　津波ノ事』である．『白子町史』等に紹介されており，『新収集日本地震史料第 2 巻別巻』（pp.203-204）に収録されている．著者は，津波当時は関より 1km 程海寄りの古所（ふるところ）村に住んでいて津波に流され，五井村の杉の木に取り付いて九死に一生を得た．古所は，『房総治乱記』の被災地リストに言う南白亀（なばき）の一部である．その手記には次のように書かれている．

「未ノ年ヨリ廿七年以前延宝四己巳年十月十日ノ夜戌ノ刻津波入前二大成地震一ツユル，此時津波六丁計打入，十丁バカリ流渡ル由謂伝ル，其以前巳ノ年ヨリ五十一年以前巳ノ年ノ如ク入ル由語リ伝ル，」

延宝四年は実際は丙辰．延宝の津波は延宝五年丁巳十月九日夜で，元禄十六年癸未の津波の 27 年前である．巳ノ年（延宝五年：1677）の 51 年前は 1626 年，寛永三年で，特に高潮や津波の記録は無い．

一般に，明治より前の記録に書かれた「何年前」には計算間違いが多い．延宝までの計算にも既に誤りがある．しかし，延宝津波の 51 年前では慶長九年（旧暦では 1604 年に対応）まで 22 年足りない．延宝四年からとしても 21 年である．

誰かが慶長九年から現在までの年数を数える際に「寛永」の 21 年間を落としてしまったのでもない限り，51 年前の津波は説明がつかない．

それでも，延宝津波の五十年くらい前にも同程度の津波があったことが語り伝えられていたことが分かるのは貴重である．

もう一つは，外房南部の千葉県安房郡和田町真浦（もうら）の威徳院の「大津波供養塔」である（『和田町史　史料集』）．真浦は『房総治乱記』のリストの「和田」のすぐ西隣の村である．

この供養塔は元禄津波の供養塔であるが，五十回忌の宝暦二年（1752）に再建され，その 80 年後の天保二年（1831）にまた建て替えられた．

碑文の中に慶長津波について述べた部分がある．

伝聞往昔慶長八癸卯十一月廿三日
応天赦之日此所津波騒動其後過一
百年而元禄十六癸未十一月廿三日
亦天赦之日也夜半過大地震而津波
至当山階下村中溺死八十四人西白
須賀不二山東表自山八分崩落人家
宇人数廿八人入大地今之地蔵堂辺
也右為諸聖霊同證佛果雖石拾一基
立之（下略）

「慶長八年」という年がどこから出て来たのかは分からない．十一月二十三日というのは，元禄地震の日付に引きずられたものであろう．2 回の建て替えの際に写し誤りが生じたのかも知れない．

天赦日（てんしゃにち）というのは，迷信度の高い暦注の一つで，最上の大吉日とされており，春は戊寅，夏は甲午，秋は戊申，冬は甲子の日である．

元禄地震は十一月廿二日の夜，日付は廿三日の丑刻に発生した．廿二日が甲子で，正に冬の天赦日である．慶長八年十一月廿二日は甲戌，同廿三日は乙亥で天赦日ではない．中世以来の南関東の主要地震の日付を調べたが，天赦日に起こったものは見つからなかった．

ところが，慶長九年十二月十六日は辛酉に当り，

従って 3 日後の十二月十九日が甲子，天赦日である．一般に暦の上で特別な日に起こった地震は○○の地震として長く語り継がれることが多い．「市の立つ日の大津波（慶長三陸津波の際の大槌）」というような記憶も同様である．これに対し，日付の年月日は誤伝が生じることが少なくない．慶長房総津波の軍記類の日付がまさにその実例である．天赦日に近い日に起こったことが人々の記憶に残ったのだろうか。

現存する天保再々建石碑の碑文のテキストの信頼性はあまり高くないが，慶長の津波の存在をはっきり記しており，「軍記物」による先入観が文面に反映した形跡は見られない．また，地震に言及せず，津波について「騒動」と書いて人や建物に被害があったとは書いていないことは，テキストに過度の信頼を置けないとはいえ，やはり注目される．

§11. 慶長房総津波の研究史

慶長の房総津浪は『当代記』の存在，『増訂大日本地震史料』以降はこれに加えて『大宮神社古記録抄』のおかげで抹殺されることは無かったが，「軍記物」の劇的表現と多数の被災地の列挙は，かえって研究者の不信を招いた．今村（1943）はそれらを「途方もない誇張」と断じ，大森（1913）の房総沖震源説を鋭く批判した．

現在でも慶長南海・東海地震の性格はまだ充分解明されておらず，房総の地震・津波記事については，何が起こったのかという事実認識にすら定説は無い．

羽鳥（1975）は外房地域の津波の高さを 5～7m とし，特に八丈島の津波を重視して，波源域としては南海道沖と房総沖の二元モデルを提唱した．

石橋（1978）はそれまでの震源域説を再検討し，房総沖震源域説に疑問を投げかけ，南海沖から東海地方沿岸域に至る震源域モデルを提唱した．

萩原尊禮編『古地震探求―海洋地震へのアプローチ』（1995）第 5 章「慶長九年（1605）十二月十六日地震について―東海・南海沖の津波地震か」の中では，山本武夫による史学的立場からの調査と，萩原尊禮による地震学的立場からの見解の 2 部構成で，この地震を総合的に研究している．

房総地域について山本は，一次史料が存在しない状況で，現在の僅かな手がかりをもとにして考察する限り，この地で大規模地震津波の被害を想定するのは無理である，としている．

萩原（1995）は『房総治乱記』の列記する「45 カ所」の地名を「後年繁栄に向かった頃の外房一帯の村名を羅列し，文章に箔をつけたにほかならぬように思われるのである．」と断じている．

最終的に萩原は，「慶長地震」に伴って外房沿岸に地変や津波被害があったとは認められないという結論に達した．

『当代記』の小田喜領の津波についての記事も否定されてしまった理由は書かれていない．

宇佐美（1996）『新編日本被害地震総覧[増補改訂版 416－1995]』は，南海沖と東海沖の 2 つの地震が生じたものと考えた．紀伊以東の津波については，東海沖としても説明される，としている．

§12. 慶長九年に房総で何が起こったのか

慶長の房総地震・津波とその震源・波源域について，その後目立った進展は見られない．

モデルを検討する以前に，何が本当に起こったかをという事実関係を明らかにできる史料があまりに乏しいためであろう．

今回の史料の再検討によって，『当代記』に津波による大被害が記された大多喜藩領の海辺の村々の場所はほぼ限定できた．『大宮神社古記録抄』という，地震と津波を記した古い記録が存在する岩和田が，推定された藩領の海辺の村々の中にあることも，この地域で津波による被害があった可能性を高めるものである．通常，寺社の古い年代記には，京都など近畿地方の視点による災害記事が挿入されていることが多いが，『大宮神社古記録抄』は地元での有感地震を数多く記載する史料であり，39 日ゆれたという記事も，京・大坂で無感だったことを考えれば，中央の史書を書き写した記述と片付けるわけには行かない．

「軍記物」があてにならないことは，前節にあげた，今村，石橋，山本，萩原ら，多くの研究者が強調するところである．地震や津波についての大げさな表現はもとより，発生した日付も，話を盛り上げるのに適当な場所に設定されたように疑われるものもある．山崩れ海埋みてという地震についての記述は，日本全国という視点から記しているように思われる．

地震の時にわかに潮が引き，二日一夜干潟となった後，夜中に突然大山のように波が襲って来たというのも，記述通りには受け取り難い．

引き波から始まった後の津波によって海岸で多くの犠牲者を出した例は『当代記』にも記されているが，多くの人に強烈な記憶を残した筈で，津波はそれ程でなかったにしても，軍記の中にそのような場面を効果的に使いたいという作者の意図が働いた可能性は

充分考えられる.

『房総治乱記』には 45 ケ所のうち 35 ヶ所の名前しか書かれていないので，元来は九十九里浜から安房南端まで，浜行川や興津も含めた外房一帯の村名を単に羅列したリストだったのではという疑いを完全に否定することはできない.

しかし，『房総治乱記』の巻末の地震・津波と南蛮船遭難の記事は，山本(1995)が指摘しているように，後の書き入れが誤って混入したのかと疑われる程，本編の筋とは全く無関係で，時間的にも孤立したエピソードである. 南蛮船遭難の方は，日付も正しく，船から流出した宝物が強調されている他は客観的でほぼ正確な記事である.『房総治乱記』もしくは後補者の作文というより，たまたま津波被災地のリスト(と称するもの)を得て収録したのではないだろうか.

そして，被災リストを地図上にプロットしてみると，偶然かも知れないが，大多喜領海辺の村々の被災とも整合的のように見える. 岩和田に加え，新史料が見出された天面もこのリストに名が記され，「一つ前の津波」に言及した史料がリストの地域の北端に近い白子町と，南端に近い和田町真浦で見つかったことを考えあわせると，このリストを一概に作り物と片付けることはできないように思われる.

§13. まとめ

現時点で次のようなことが言えるだろう.

慶長九年十二月十六日に外房沿岸域で地震を感じ，所々に津波が押し寄せたことは，事実と考えられる. 震動による被害があったか否かはわからないが，真浦の供養塔のように地震に言及していない資料はあっても，「何の前触れも無く潮に変化があった」と述べた史料は存在せず，天面の『御縁起』でも地震を明記しているので，地震を感じた可能性は高い. 但し，震動による被害があったと記した確かな史料は無い.

津波の規模が，元禄地震の津波よりはるかに小さいことは確かであろう. 和田町真浦の碑文も，大きな被害は無かったように読み取れる.

確かな被災地は，岩和田を含む大多喜領の海辺の村々と天面である. 延宝津波程度という九十九里浜の白子町も，年数が合わないので断定はできないが，参考地に加えることができる. 数が少ないので偶然かも知れないが，いずれも東向きの海岸である. 房総半島が東に張り出した江場土から岩和田に至る大多喜領地域と天面では津波はかなりの高さに達していただろう.

地震後潮が二日一夜引いたというのは，そのように書かれた一資料が多くの軍記物著作家の目を引いたという以上のことは言えず、常識的に，そのままには受け取りにくい. 八丈島や伊豆の記録で，2～3 日後にまた津波があったと記したものは無い. ただし，地震 3 日後の十二月十九日は，ちょうど真浦の碑文に言う天赦日に当っている. 古い地元の記録などで地震の日時を見た人が、潮引二日一夜という伝えから天赦日の津波と後世に語り伝えたのかも知れない。

現時点で慶長房総地震・津波の震源域や波源域については何が言えるだろうか.

通常の南海・東海地震であれば，房総でも大きなゆれを感じたとしても不思議ではない. しかし，慶長の南海トラフ地震は京都で震動を感じないような特殊な地震で，東海地域の震度分布もよく分かっていないので，房総で感じられた震動の源が南海トラフ系の地震であるとすれば、通常とは別のアスペリティーを想定する必要があるかも知れない。

外房地域全体としてはそれ程大規模な津波ではなかったとしても，江場土～岩和田地域では相当の高さに達したようである. 津波で騒動になった地域も含めれば範囲もかなり広かったとすれば，宝永地震級の巨大南海地震でも説明できるかどうか疑問である. そして，慶長の南海トラフ地震の津波は，宝永地震に匹敵する規模とは考えにくい.

一方、元禄地震や大正関東大地震のような，震動や地変を伴う相模トラフ系の大地震が南海トラフ系の地震と連動して発生した可能性は，史料の上からも地学的なデーターからも考えにくい.

二元あるいは多元モデルを考えるにしても，房総津波の波源は非常に特殊なものとせざるを得ない. 地震によるものとすれば，震源域がどこであったにせよ，「津波地震」の要素が強いものと考えられる.

今後は，新史料の探索及び『大宮神社古記録抄』のような「幻の史料」の再捜索に努めるとともに、大多喜領の村々の津波の高さを具体的に推定することなどにより，ある程度の定量的な議論を可能にして行きたい.

謝辞

ご多忙のところ調査にご協力いただき，貴重な史料の閲覧・撮影並びに論文への掲載をお許しいただいた，天面山西徳寺住職，島津実隆氏に厚く御礼申し上げます

文 献

萩原尊禮(編), 1995, 古地震探求－海洋地震へのアプローチ, 東京大学出版会, 306pp.

萩原尊禮, 1995, 慶長九年(一六〇五)十二月十六日地震について―東海・南海沖の津波地震か 第 3 節, 萩原尊禮(編)上掲書, 234-251.

羽鳥徳太郎, 1975, 明応 7 年・慶長 9 年の房総および東海南海道大津波の波源, 地震研究所彙報, **50**, 171-185.

今村明恒, 1943, 慶長九年の東海南海両道の地震津波に就いて, 地震 1, **15**, 150-155.

石橋克彦, 1978, 1605 年慶長大地震の震源域について―南海沖・房総沖 2 元説への疑問―, 地震学会講演予稿集 **1**, 164.

川名登他, 1984, 近世上総山村の支配と村落―大多喜地方近世史料調査報告―, 商経論集, **17**, 千葉経済短期大学, 39-86.

大森房吉, 1913, 本邦地震概説, 震災予防調査会報告, **68** 乙, 8-10.

田中敏・小山真人, 2000, 近世初期の自然災害記録媒体としての『当代記』の特性分析, 歴史地震, 16, 156-162.

宇井伯壽, 1938, コンサイス仏教辞典, 大東出版社, 1148pp.

宇佐美龍夫, 1996, 新編日本被害地震総覧[増補改訂版 416-1995], 東京大学出版会, 493 p

山本武夫, 1995, 慶長九年(一六〇五)十二月十六日地震について―東海・南海沖の津波地震か 第1節・第2節, 萩原尊禮(編)上掲書, 160-234.

史資料

房総軍記, 1916, 国史叢書, 国史研究会, 445pp.

房総治乱記, 1940, 房総叢書 **2**, 房総叢書刊行会, 516pp.

千葉県寺院明細帳, 1879, 千葉県文書館所蔵

千葉県神社明細帳, 1879, 千葉県文書館所蔵

補訂版国書総目録, **7**, 1970, 岩波書店, 951pp.

関八州古戦録, 1967, 戦国史料叢書第期 15, 人物往来社, 545pp.

近藤富蔵, 八丈実記, 八丈実記刊行会(編), 1964－1976, 緑地社, 全7巻, 3518pp.

森田洋平(編), 1985, 本土寺過去帳年表, 我孫子市教育委員会, 196pp.

武者金吉, 1941, 増訂大日本地震史料 **1**, 945pp.

東京大学地震研究所(編), 1982, 新収日本地震史料, **2**, 575 pp.

白子町史編纂委員会, 1965, 千葉県長生郡白子町,1080pp.

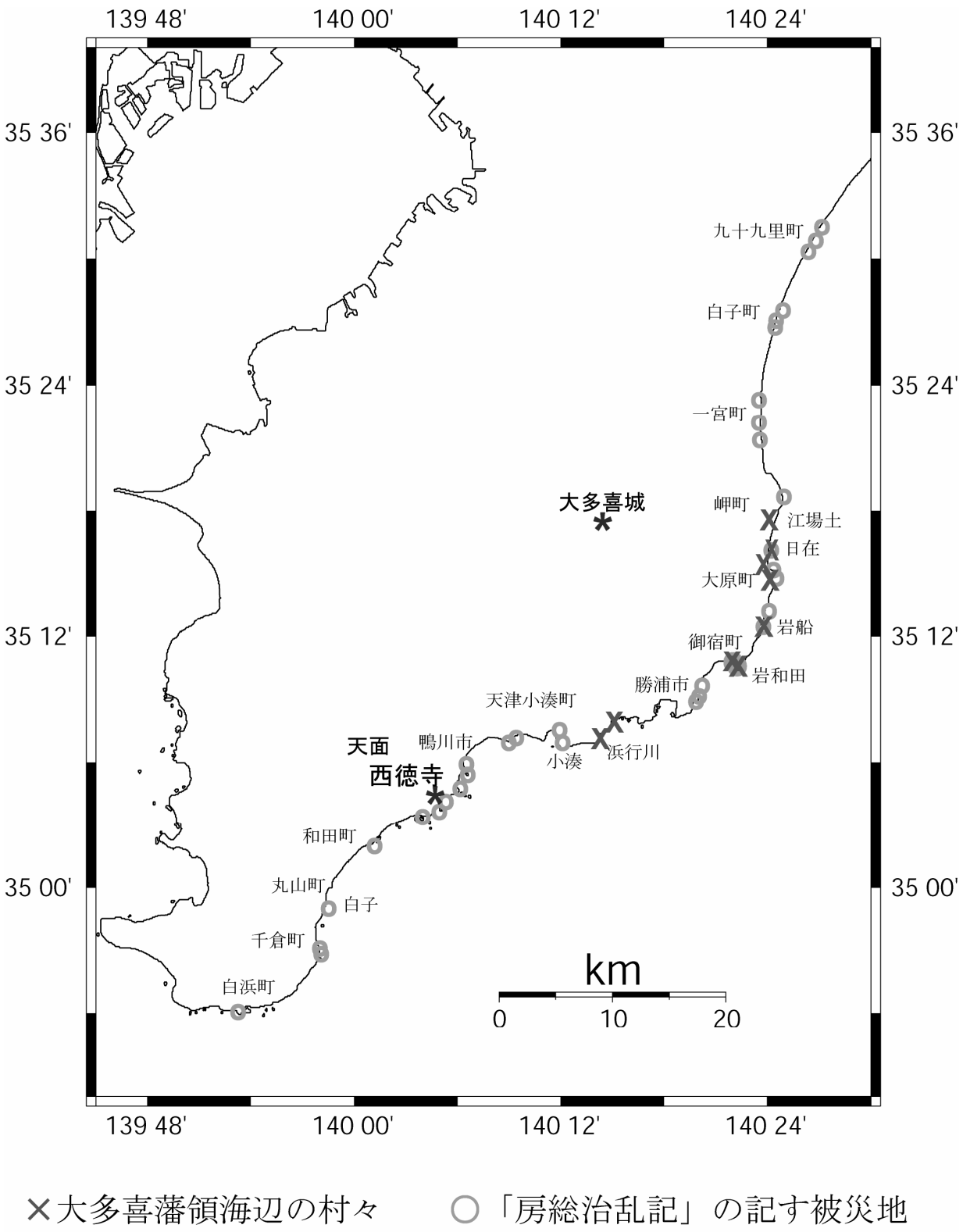
当代記,1995,史籍雑纂, 続群書類従完成会,319pp.

徳川実紀(10 冊), 黒板勝美・國史大系編修会編, 1964-1966, 新訂増補國史大系, **38-47**, 吉川弘文館

東京大学地震研究所(編), 1982, 新収日本地震史料, **2** 別巻, 290 pp.

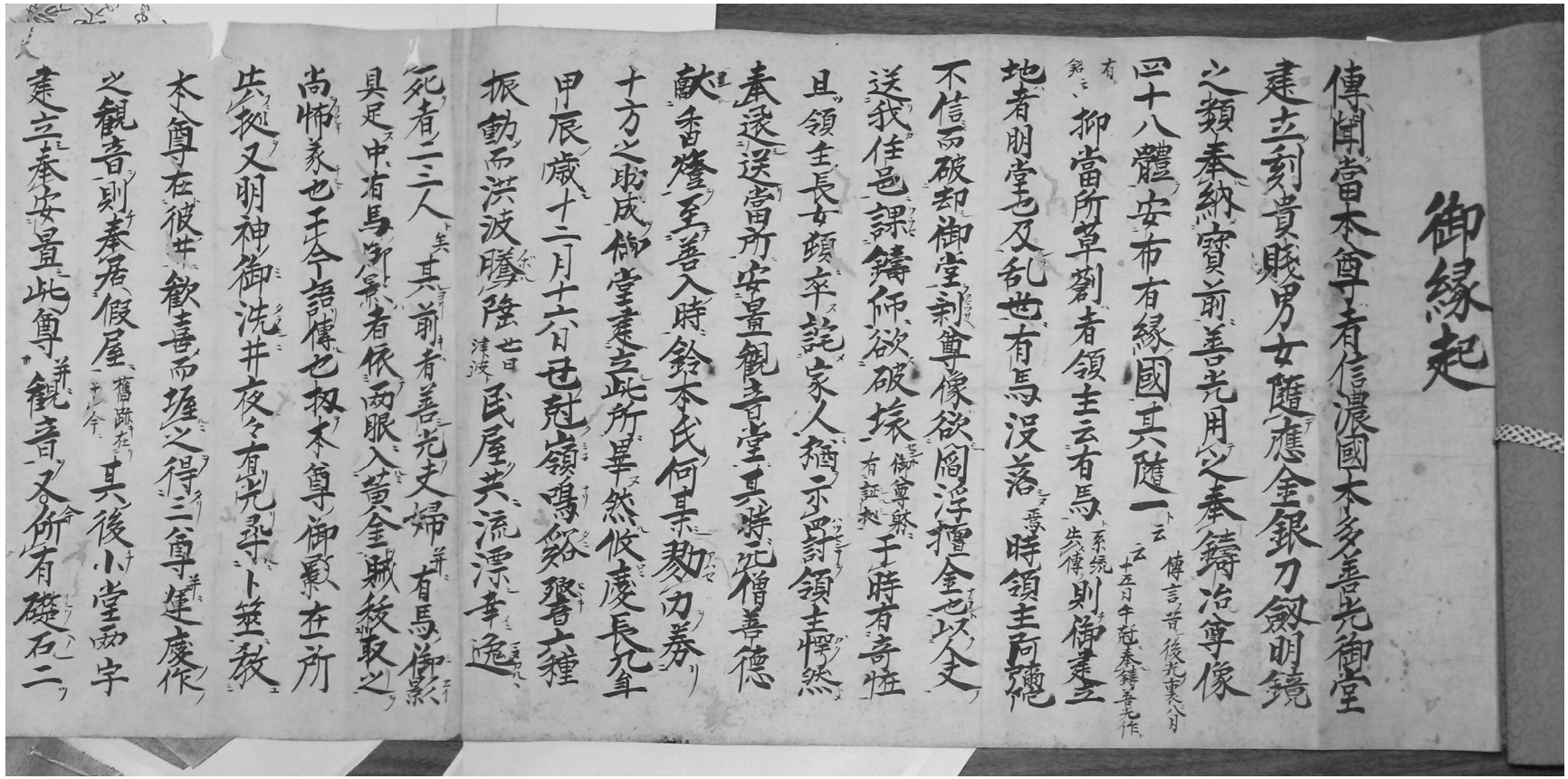
和田町史編さん室, 1991, 和田町史史料集, 和田町,651pp.

安川惟禮, 1879, 上総国誌(房総叢書 **4**, 改訂版), 改訂房総叢書刊行会, 1030pp.



×大多喜藩領海辺の村々　　○「房総治乱記」の記す被災地

図１．『房総治乱記』の記す被災地名リストと大多喜藩領の海辺の村



御縁起

傳聞當本尊者信濃國本多善光御堂
建立刻貴賤男女隨應金銀刀劔明鏡
之類奉納寶前善光用之奉鑄治尊像
四十八體安布有緣國其隨一云（傳言昔後光東八月十五日午冠奉鑄善光作）
有、抑當所草創者領主云有馬（系統失傳）則御建立
地者明堂也及乱世有馬没落時領主向德
不信而破却御堂剥尊像欲圖浮擅金也以文
送我住邑課鑄師欲破壞（御尊然有証拠）于時有奇怪
且領主長女頓卒詫家人猶示罰領主愕然
奉送送當所安置觀音堂其時光僧善德
献香燈至善入時鈴本氏何某勅功券
十方之助成御堂建立此所畢然依慶長元年
甲辰歲十二月十六日壬冠嶺鳴鈴響六種
振動而洪波騰陸（世日津波）民屋共流漂幸逸
死者二三人（矣）其前者善光丈婦（并）有馬御影
具足中有馬御影者依両眼入黄金賊殺取之
尚怖家也壬今語傳也扨本尊御殿在所
失扨又明神御洗井夜々有光尋ト並教
本尊在彼井歡喜而堀之得三尊（并）建庵作
之觀音則奉居假屋（舊跡在今）其後小堂而宇
建立奉安置此尊（并）觀音又所有礎石二

有共太尊云信列來云有馬建之時石又明
堂有万部奉納其裏書註有馬先老師見之
常生云之石塔大小不知其數乱世奪賊漸
小五篇一二基殘三十年以前此所荒居畢
享保十五年迄六十六年時
又此尊靈驗往古爰者不詳傳彼津波之
靈殆太尊自閑扉出現及四五度者入不識
之毎度奉拵篭宮殿云云又先住法印源慶
行年九十歳而天和壬戌年掩化此間支難
印鞠墨或夢中或現粗云一二壮年之比及
重病醫術盡力不在駿頗歴十有余日或夜
三尊現夢中授寶藥告曰汝病可此以尤
藥治信心做骨髓執手見之一粒大二粒小
悅而眠之夢覺而後病忽愈又或欲他行
將出門御堂圖上氣高小僧着香衣住
来急御堂迄未見之入内陳不見不思
議難暗停他出其夜御堂炎焼又或衣
冠正光翁亲尊駒詣御堂見還去入
森中近明神社壇失畢其餘不尋
記略而縁記若斯

享保五庚戌歳相丁三十三年七月十日
奉閲帳畢此砌以古本書寫畢

房州長狭郡　天面山　西德寺